

# 中国の小麦主食圏における都市住民の米食普及 —主に石家庄市における消費者アンケート調査から—

新潟大学農学部・青柳 斉

新潟大学農学部・伊藤亮司

米国農業部の統計によれば、中国の米の消費量は、1人当たり年間消費量では1991年の109kg（精米換算）、総消費量では2001年の1億3,650万トン（同）をピークとして、以後は一貫して減少している。但し、中国の米の消費動向を捉えようとするとき、米消費の地域性に留意する必要がある。いま、『中国農村住戸調査年鑑』によれば、農村住民1人当たり食糧消費では、1991年と2006年の対比で見ると、麺類やマントウ、餃子等の小麦食（面食）主食圏で米消費が顕著に増えており、他方、米を主食とする米食圏では大幅に減少している。このような米消費の地域的傾向は、おそらく都市住民においても当てはまると推測される。そこで、中国（農村部）小麦主食圏における都市住民の米食普及の実態把握に関して、石家庄市（河北省）で消費者アンケート調査を試みた。以下はその結果である。

まず、回答数40人の出身地（祖籍）では、河北省出身は7人に留まり、全国15省からの省外出身者が多い。そのうち、小麦食圏出身者は22人、米食圏は18人である。

まず、1週間における毎日3食の各食糧品目（「米食」、「面食」、「粗糧」、「その他」）の回数では、朝食が米食2～4回、「面食」1～3回、「粗糧」（雑穀等）・その他各0～1回、昼食では米食3～7回、「面食」0～3回、「粗糧」0～1回、夕食では米食3～7回、「面食」0～3回、「粗糧」1～2回というように、3食とも米食の頻度が最も高く、そのなかでも昼食で最も多い。出身地別では、米食圏出身者は小麦食圏の出身者より米食が多く、特に昼食ではほぼ毎日が米食である。これに対して小麦食圏出身者では、朝食では「面食」と米食が半々であり、米食圏出身者より「面食」志向が多い。但し、昼食・夕食の回数では米食が「面食」を上回っており、小麦食圏出身者でも過半は米食が主食になっている。

また、家庭での回答者本人の米消費量では、小麦食圏出身者（69kg）よりも米食圏出身者の米消費量（84kg）が大きい。そして、10年前及び5年前、現在との対比では、小麦食圏及び米食圏の出身者ともに米の消費量は増えている。小麦食圏出身者では各5年ごとに6～7kgの増大に対して、米食圏出身者は10kgから5kgに増大幅が減少している。家庭で米食の開始時期では、米食圏出身者は70年代、80年代に集中し、小麦食圏出身者では10年くらい遅れて80年代、90年代に集中している。また、今後の米消費の増大意向に関しては、米食圏では現状維持が多数であるが、小麦食圏出身者では約3分の2で増やしたい意向があり、その場合、1～3割増が最も多い。なお、米飯・マントウ・麺・餃子・「餅」・粟・パン等の主要8種の穀物製品なかでの嗜好順序を問うと、1指摘では米飯が30人と回答者の4分の3を占め、その中には小麦食圏出身者22人のうち13人が含まれている。

以上の調査結果から、農村部が小麦食圏の省であっても、都市部では米食が急速に普及していること、その背景には、小麦食圏出身者における近年の米消費量の増大及び今後の米消費志向の強さがある。なお、このような傾向は、農村部の米消費が河北省よりも少ない山西省の太原市における消費者アンケート調査結果からも確認される。